

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：32645
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2021
 課題番号：16K02573
 研究課題名(和文) リルケとオカルティズム

研究課題名(英文) Rilke and Occultism

研究代表者

城 眞一 (JO, Shinichi)

東京医科大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：60424602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この企画によって、リルケの詩論が、同時代の一世を風靡した、カール・デュ・プレルのスピリティズムを継承するものであることが判明した。第一に、「自動筆記」の方法において、第二に、「意識のピラミッド」とされる詩作装置の構造図において、デュ・プレルの影響は拭い難い。詩人は「霊媒」として、ほとんど生涯をかけて、聴きつつ言う者であろうとした。事実多くの著名な作品を残したが、詩人と霊媒と死者(神的なる者)の一体体験の至福の瞬間は、持続的に維持できるものではなく、絶えず分裂に苛まれた。かつては宗教的祭祀であった降霊術が、芸術の方法となったモデルネの時代の、それは宿命であったのだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リルケの作詩方法とスピリティスト、カール・デュ・プレルにおける自動筆記の方法論をテクストレベルで照合し、両者の類似性と差異を検討した。その結果、前者が後者の本質を継承していることが判明した。リルケのオカルティズムについての研究は、比較的新しい領域であるが、今回、リルケの自動筆記論と意識のピラミッド論の由来が解明できた。このことによって既存の、孤高の詩人リルケといった固定観念が打破され、リルケこそ内奥において時代と深く繋がっていたことが証明できた。

研究成果の概要(英文)：In the history of the Rilke-research it is well known that in Rilkes poetics works the spiritistic/spiritualistic way of thinking. The aim of this project is to elucidate the function and the origin of the spiritistic core in his poetics. In the course of this research, first the automatic writing and then the structure of the consciousness-pyramid proved to be important elements in his poetic method. Comparing Rilkes texts with those of Carl du Prel, we found out that it was du Prel who suggested the seancelike poetic creation in Rilkes early days in Munich. Thus Rilke became a typical, spiritistic poet in "der Moderne", who had to overcome first by means of his new method the crisis of language caused by the complicated, intercultural situation in Prague, like Yeats and Beckett in Dublin, and for whom this new phase of the seance was no longer an esoteric ritual, but an experimental little theater of the occult science.

研究分野：ドイツ語文学

キーワード：リルケ オカルティズム カール・デュ・プレル

1. 研究開始当初の背景

本格的なリルケ研究は第二次大戦直後の実存主義的解釈に始まり、つねに実証主義に裏打ちされながらも 1960 年代の政治の季節には黒くあるいは赤くこの詩人の塗り替えが行われたこともあった。その間、リルケの宗教性をめぐる論争ないしは研究は、時代の流行にかかわらず、絶えることなく行われてきた。既成宗教との関連を論じる研究が圧倒的に多いが、その中でも何らかの「神秘主義的なもの」との関連を問う研究がとくに多い。本研究は大局的には、この部類に属する。

リルケ文学におけるオカルティズムないしはスピリチュアリズム(スピリティズム)の大きな意義は、その内面史の側面および広範な同時代の思想的コンテクストの側面においても、いまだ十分に精査されていない。この研究開始に当たり、すでに刊行されていままなお使用に耐える優れた研究書は数冊を数えた。代表的なものを挙げれば、古くはノーラ・ウィーデンブルック(1949年)比較的最近では、プリスカ・ピュトリク(2005年、2006年)、ギュイスリ・マグヌソン(2009年)らによる研究が名高い。これらは同時代の心霊主義とリルケのかかわりをそれぞれの立場で広範に、あるいは深く考察していて、たしかに当研究計画にも大きな影響を与えた。

しかし本研究は、以上の一般的研究史とは別の背景を持っている。それは他ならぬ当研究計画の企画者が実行した二つの科研プロジェクトである。基盤研究(A)「プラハとダブリン 20世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』」(2006年度~2009年度)および、基盤研究(B)「プラハとダブリン、20世紀文学の二つのトポス 言語問題と神秘思想をめぐって」(2011年度~2013年度) これら二つの研究会から得られた知見を、当研究は、むろん引き継ぎ、リルケを、マウトナー、カフカ、イエイツ、ジョイス、ベケットらと共通の問題性を抱かえた詩人として把握している。錯綜した政治、宗教、民族、言語の「間文化的 intercultural 状況」がもたらしたものの、それは国家への帰属性の揺らぎに起因する、母語の自明性の喪失あるいは言葉と事物の乖離であった。この一種の言語危機ないしは言語懐疑を克服するための長い旅路が、上記の数名の作家たちの人生だった。かれらは、伝達のための日常語の彼方に、本当の言葉を探し求め、超言語的世界において啓示された新たな言語によって己の言語世界を創造していった。

このように二つの先行研究によって抽出され、かつ各国文学史を超えつつ繋ぐ普遍的な認識を、リルケ研究の場にフィードバックさせたとき、いかなるリルケ像が誕生するであろうか、しかもオカルティズムとの関連ではどうか。以上が当研究の発想された当時の背景である。

2. 研究の目的

当研究を申請したさいの研究計画調書(2015年)には次のように記されていた。リルケは同時代のオカルティズムに一時的に染まったのではなく、詩を嗜む以前に、まずオカルト主義を志向し、隠されたもの *occulta* の存在を認め、称揚し、生涯の果てまで歌い続けた、厳密な意味でのオカルト主義者であった、と。リルケの場合、最終的に確立されたのは、ごく初期から親炙した神秘思想の系譜につながる詩論であった。それは詩行の随所で語られ、仄めかされることではあるが、死者ないしは幅広い意味での使者の声を聴き *hoeren*、あるいは何者かによって口授 *diktieren* されたものを、あえて言うこと *zu sagen wagen*、すなわちこの「冒険的言表」*Sagnis* [リルケの造語]が、その詩論の中核をなしていた。換言すれば、それは一般にオカルティズムとくにスピリチュアリズム/スピリティズムと称される考え方に近い方法であった。以上の研究上の「期待値」を立証することが、本研究の目的であった。

同時に、当企画は、上述の「プラハとダブリン」研究で獲得された汎ヨーロッパ的言語危機にかかわる知見をリルケ研究史の枠内に再投入し、リルケの詩作の根源となっている霊媒的言語体験の位相を、既存のリルケ研究には存在しなかった視点から解明することを目的としている。

3. 研究の方法

そのために具体的な方途をいくつか設定した。すなわち、リルケの詩論と詩作の形成過程に決定的に作用した、詩人自身の体験、読書、創作等を、項目 1.の「背景」の視点から、再解釈することとした。

(1) 初期プラハ時代の言語体験の問題について。デーメツ以来すでに多くの研究者が報告しているが、ここでは改めて上記の背景のもとに問い直し、同時にプラハ出立、ミュンヘン遊学の意義、あるいはその意図を、ミュンヘン在住の心霊主義者カール・デュ・プレルとのかかわりにおいて、とくにテクストレベルで解明すること。

(2) リルケの初期の日記『フィレンツェ日記』(1898年)と詩集『時禱書』(1905年)における神概念について。ルネッサンスの絵画に描かれた神々からの触発、あるいは正教の神学、とくに聖山アトスのイコン画教本から学ばれた方法論。その詩芸術への応用の成否について。

(3) トリエステ州ドゥイノの城におけるリルケ自身の手になる「降霊会報告」(1912年)の

意義について。この体験が前後の作詩方法に与えた効果について。「聴きつつ書く」『ドゥイノの悲歌』の方法が定着か。

(4) 詩集『C.W.伯の遺稿から』(1920-1921年)の作者をめぐるリルケ自身の説明における矛盾の意味するもの。降霊会のひとり芝居か、そこには詩人と霊媒師と死者の分裂が認められる。

(5) 詩集『オルフォイスに寄せるソネット』(1922年)の真の作者をめぐる。反復される「聴くこと」と「書くこと」の融合と分裂。

4. 研究成果

大小多くの発見があったが、とりわけ明瞭に顕在化したことを、以下に記しておきたい。

リルケの幼少期を過ごしたプラハの言語状況については、すでに多くの報告がなされているが、同時代のダブリンと比べても、ドイツ語だけでもほぼ三種のドイツ語が分類され(マウトナー)、リルケは「紙に書かれたドイツ語」と称された、支配層のプラハ・ドイツ語を使用し、その問題性を避けがたく背負うこととなった。多言語の併存は、他の言語との接点で言葉の乱れを招き、双方に酷い状況をもたらす場合もあった。リルケはプラハ出立当時にはその言語環境に含まれる毒素を判然と自覚していなかったかもしれないが、長じるにつれて、この最初期の釘の掛け違いのような言語体験が、災いの元凶であるかのごとく回想し、呪詛するときもあった。この悪しき言語体験を超えるための方法を求めて、リルケはミュンヘン在住の自称スピリティスト、カール・デュ・プレルに接近を図ったものとみられる。当時、オカルト的な考え方は今日と異なり、科学として扱われ(Geheimwissenschaft, occult science)、多くのオカルティストが新メディアである雑誌を活用し、若い読者を惹きつけていた。詩的言語の探求を始めたばかりのリルケが、プラハの錯綜した言語状況を離れて、この崇拜してやまない碩学に会見を申し込み、実現させたとしても不思議ではない。デュ・プレルと後のリルケ双方のテキストを照合することによって、乏しい伝記的事実の背後に、われわれは看過できない、かれらの共通するモチーフを発見することができた。

そのひとつに、「自動筆記」(das automatische Schreiben)の方法論がある(『自動筆記』、『オカルト学による魂の発見』第7章に所収 1894年、初出は雑誌「スフィンクス」1891年)。ここでデュ・プレルは降霊会の方法として、テーブルターニングから叩音、そして鉛筆を支柱の一点として差し込んだ可動性のプランシェット板などを紹介しているが、かれによれば霊媒の究極形態は、プランシェットのような道具を取り払い、やがては筆記用具のみを用いて、無意識から現れた超越的主体の語りを書き取ることにあり、そのとき詩人ないしは霊媒の身体は、純粹にその主体の手として使われる、と主張する。フランスのギュイヨン夫人、ウィリアム・ブレイク、スウェーデンボルグらがこの種の自動筆記によって創作した、とデュ・プレルは実例を挙げている。霊媒師と詩人が一致していることに、リルケは魅了されたとみられる。

ところで、われわれは遅まきながら、ここにリルケの名を加えることができるだろうか。結論を先取りすれば、一定の条件付きで肯定的に答えることができる。その理由を以下に報告する。

リルケの作品や書簡においてデュ・プレル流の自動筆記のモチーフは容易に探し出すことができる。『マルテの手記』の中の詩論、無意的記憶の中からの詩の最初の言葉の立ち現われをまず挙げるべきであろう。あるいは同じ作品の中に二度待望される、一者の出現、その時には「手は私の考えてもみないことを書き記す」こととなり、深い悲惨は至福に転じるという。詩作品『ドゥイノの悲歌』は、不毛の時期とされる1910年から1922年の間に間歇的に、あたかも詩人の口ないしは手を借りるかのよう、出現してきた詩行である。その間、ドゥイノの城内では、降霊会がプランシェット板によって行われ、被験者のリルケは霊媒の記した霊の言葉を自ら浄書した。ちなみにその言葉を残した「未知の女」の助言どおり、リルケはほどなくトレドなどを訪れ、「出来事の統一世界」を発見している。この体験は滞っていた創作に刺激を与え、成立し始めた『ドゥイノの悲歌』の作詩方法を定着させた。そして詩集『オルフォイスに寄せるソネット』は自動筆記の好例であろうと思われる。ただしこの作品においては、詩人が詩神オルフォイスと融合する瞬間もあれば、人間の運命の世界に突き戻される瞬間もある。自動筆記のさなかに亀裂のように走る意識の分断は、深い印象を残す。またエッセー『体験』は、ドゥイノの庭での特殊な空間体験を描いたまれな作品であるが、多くの研究者が指摘しているように、ここでは、生者と死者、身体と魂、此岸と彼岸などの二項対立が、震えるような文体によってたしかに解消されている。以上のように、初期から晩年に至るまでリルケの詩論とその実践は、デュ・プレル流の自動筆記の理論の詩的応用のように思われる。

リルケ最晩年の、ノーラ・ヴィーデンブルック宛に書かれたいわゆる「オカルト書簡」(1924年)は意識のピラミッドを用いて、自らの創作の装置を熱心な受信者にわかりやすく説明したものであるが、じつはその原型は、またしても上述したデュ・プレルの論文『自動筆記』に記されていた無意識なるものの構造図にあることも、今回、双方のテキストの照合によってあらたに確認された。デュ・プレルにおいては意識の下部にあるわれわれの無意識なるものが、表層に引き寄せられたとき「自動筆記」が可能となるとされていた。リルケは「ごく若いころから」意識のピラミッドの図式に従って生きてきたと言葉を添えていることから、その図式は最初のミュンヘン時代あるいはそれ以前のデュ・プレル体験から着想されたものと推察される。

リルケのオカルティズムに限って言えば、それは初期のデュ・プレル体験に負うところが大きいと言わざるをえない。しかもその持続性はリルケの全詩業に及んでいることには驚きを禁じ得ない。それではリルケはデュ・プレルの理論の完全な理解者であり、詩人としてその理論を生きたスピリティストであったのか、デュ・プレルの論文の中で称揚された人々に名を連ねることができるだろうか。この問いに答えるためには、避けがたく『C.W.伯の遺稿から』の著者はだれかを問わなければならない。いわばエクリチュールの舞台裏をこのときばかりは詩人は熱心に解説したからである。リルケの証言は、短期間の間に揺れている。館の持主には、あるべきはずの先住者の冊子がなかったので、自分で書く以外に致し方なかった、と説明し、その後言い換えて、ノートに詩を書き始めたところ、ペンは文字通り運ばれて gefuehrt 詩が生まれてきた、と別人物に解説し、最後は口頭でインゼル社主に対しては、館の先住者とおぼしき男が現れ、対座して古い原稿から詩を朗読してくれたので、これらをのちに書き留めた、それが C.W.伯の詩である、と語った。ここでは詩人、霊媒師、そして死者が個別に現れ、リルケは忙しく間髪を入れずにこの三者に扮して、降霊会の「ひとり芝居」を演じているようだ。この意識の分裂、これはやはりモデルネの詩人の宿命、あるいは言葉を覚えた人間の古来からの宿命なのかもしれない。これを以って上記の問いはおのずと解を得た。

さてこの研究の当初の企てはどの程度実現を見たであろうか。まず、「ブラハとダブリン」の詩人たちの比較文学的研究から得られた典型的詩人像に照らして、リルケはどのように位置づけられるだろうか。リルケの場合、特筆すべきは、詩論自体がスピリティズムと見分けがつかないほど一致している点である。しかも、その方法論は生涯を覆うほど深く確実に、定着していた。そして、多くの詩が、その方法によって事実、創作された。しかし、一方で、晩年に至るまでリルケは霊媒師と詩人の完璧な融合体験を、持続的に持つことはなかったようである。合一がなされた次の瞬間に、覚めた意識がもう弁解の言葉を探している。「おお、そのとき飲む者が奇妙に行為から離れていくことか。」(『第二悲歌』から)

この種の分裂体験は、ダブリンのイエイツやベケットにおいて、やはり認められるものであろうか。今回は、複数の理由から、そのことを確かめるには至らなかった。世情が許せば、この研究結果を手土産に、その道の優れた研究者からこころゆくまで教えを乞いたい。

最後に思想史上の意義についてひとこと添えておきたい。こうしたオカルティズムないしはスピリティズムの方法は、ヨーロッパの世紀転換期の時代にはもはや「秘儀」ではなく、誰もが例えばデュ・プレル著の文庫本を教科書に、買ったばかりのプランシエツト(自動筆記の補助版)を用いて、「実験」が可能であった。芸術家ないしは詩人たちが、その効果にいちはやく目を付けた。それは大いに流行り、本来は死者を呼び出すための秘儀的祭祀は、汎ヨーロッパ的な宗教思想の新たな局面をもたらした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 城眞一
2. 発表標題 リルケとオカルティズム 自動筆記の理論と実践を中心に
3. 学会等名 科研研究会「プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ 翻訳 の諸相」第3回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 城眞一
2. 発表標題 「プラハとダブリン」研究会のこれまで
3. 学会等名 科研研究会「プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ 翻訳 の諸相」
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 酒井潔 / 鹿島徹 / 茂牧人 / 村井則夫 / 後藤正英 / 渡辺和典 / 川口茂雄 [編者]、城眞一 [項目担当者] : リルケ、オルフォイスへのソネット	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 2000頁予定
3. 書名 現代ドイツ哲学・思想事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------